

平和博物館にみる戦争記憶の展示

—「立命館大学国際平和ミュージアム」と

「大阪国際平和センター・ピースおおさか」を事例に—

山 本 剛

2006年度法学部法学科卒業生

愛知教育大学大学院へ進学

1. はじめに

2. 「立命館大学国際平和ミュージアム」における戦争記憶の展示

- (1) テーマ1：十五年戦争
- (2) テーマ2：現代の戦争
- (3) テーマ3：平和を求めて

3. 「大阪国際平和センター・ピースおおさか」における戦争記憶の展示

- (1) 展示室A：大阪空襲と人々の生活
- (2) 展示室B：十五年戦争
- (3) 展示室C：平和の希求

4. おわりに

1. はじめに

一昨年、日本は戦後60年を迎えました。戦後60年という時間は日本人に戦争の記憶を風化させつつあります。それを反映してか、現在では日本国憲法改正への動きが着々と進んでいます。しかも改正の焦点となっているのは先の大戦の反省が最も表れている憲法第9条です。私たちは、もし国民投票で憲法改正の是非を問われたならば、戦争の実態を理解した上で、その答えを出すことができるでしょうか。

そして、先の大戦で甚大な被害を受けた周辺の国々では、今なお戦争の記憶が消え去ることはありません。これからアジア諸国との平和的關係を作り上げていく上でも、日本が引き起こした戦争を、私たちが語り継いでいくことは不可欠です。

しかし、実際に戦争を体験した人たちの高齢化によって、戦争体験者の数は少なくなり、戦争の記憶を語り継ぐことが困難になりつつあります。このままでは近い将来、戦争を知らない世代が戦争の実態を知る術はなくなってしまう。「戦争が歴史に移行しつつあるなか」⁽¹⁾で、私たちは戦争の記憶を、一体どのように語り継げばよいのでしょうか。

そこで、その手掛かりを、平和博物館や記念館といった場所に探ろうと思います。なぜなら、そこには、今なお過去の戦争の実態を訴え続ける資料や記録が保存され、そうした場所こそ、これからの時代、戦争と平和について考える場として重要になるのではないかと考えるからです。日本には世界の平和博物館の総数の約半数があると言われますが、その中から私は、「立命館大学国際平和ミュージアム」と「大阪国際平和センター・ピースおおさか」を訪ね、実際の展示をもとに考察することにしました。

2. 「立命館大学国際平和ミュージアム」における戦争記憶の展示

「立命館大学国際平和ミュージアム」は、史上初の大学立の平和博物館として、1992年に開設されました。（図1参照）ここでは次のように博物館の理念を掲げています。

「人類は20世紀において、2度におよぶ世界大戦を経験し、幾千万もの命を失いました。しかし、地域紛争は今なお絶えることなく、多くの人々が生存の危機にさらされています。また飢えや貧困、人権抑圧や環境破壊など人類が共有して解決すべき問題も、多様な形で浮上してきています。わたしたちは、紛争の原因を取りのぞき、人間の可能性が豊かに花開く平和な社会の実現にむけて努力することが求められています。立命館大学国際平和ミュージアムは、平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむために設立されました」⁽²⁾。

このような理念の下、立命館大学国際平和ミュージアムは、(1)十五年戦争、(2)現在の戦争、(3)平和をもとめて、という3つのテーマに沿って展示を行なっています。そこで、このテーマの順に、それぞれ展示内容を見たいと思います。

(1) テーマ1：十五年戦争

テーマ1の十五年戦争の展示は、以下の6つに分かれていました。

① 軍隊と兵士

十五年戦争を理解するためには、まず日本の帝国軍隊の特徴を知らなければなりません。展示では、当時の軍隊の最高指揮権が天皇であること、上官の命令は天皇の命令であること（ゆえに、上官に逆らうことは天皇に逆らうことになり、当時の軍隊では上官の命令が絶対であったことに結び

つく) や、精神主義が強調されていたことなどが取り上げられています。

具体的な資料としては、「戦陣訓」といわれる戦時下における陸軍将兵の心得を示したものや、兵士が食料や予備弾薬などを入れ背負っていた背囊があり、背囊は実際に背負ってみることができました。(図2参照) この背囊に雑囊や水筒をつるし、銃を持ち、携帯天幕、小型シャベルまで装備すると最低でも30kgになったと言われています。私も背囊を背負ってみましたが、戦時下の兵士の置かれた厳しい状況を垣間見る思いがしました。このように当時の状況を「体験」すれば、戦争を知らない世代でも、戦争を知るきっかけになると思います。

そして次に、十五年戦争がどのような仕組みで起き、どんな経緯をたどったのかが説明されています。ここで注目したいのは、この十五年戦争で日本軍が中国に対し行なった無差別爆撃、毒ガスや細菌兵器などの使用、戦場での捕虜や民間人の殺害、抵抗する地域を破壊し尽くすような作戦を取ったことや、今なお大きな問題となっている慰安婦問題が、当時の写真(植民地や占領地から兵士たちに性的奉仕させるため、慰安婦たちが強制的にトラックで連行されている様子)を用いて紹介されている点です。

こうした日本が行なった加害について深く理解することが、アジア諸国の人々の対日感情を理解するのに不可欠であり、また、これら加害の実態を見ながら、自分が兵士と同じ立場ならどうするかと考えることが重要だと思います。たとえ自分は民間人を殺さないと思っても、命令に従わなければ上官に処分されたり、酷い罰を受けたりします。戦争とは人間の良心や人間らしさを奪ってしまうことを理解する必要があります。

② 国民総動員

十五年戦争の大きな特徴として挙げられるのが、この戦争が日本にとって国のすべての力を注いだ総力戦となったことです。そのために戦場の軍

隊だけでなく、戦場に兵士を送り出したあと、女性、青年、学生や子どもたちも動員され、それぞれ戦争に協力させられました。中には現在の高校生くらいの歳の子が戦闘に参加させられました。同年代の若い人も、それを知れば戦争がどのようなものか、自分に重ねて思い描くことができるのではないのでしょうか。

展示をみると、男の人は戦場に狩り出されて、残った人々も厳しい節制を強いられ、国民の日常生活は非常に困窮を極めた状況を、戦争中の民家の再現を用いて説明していました。そこには戦時中の国民の家や暮らしの道具に焦点を当て、生活の変化により政府が戦争をどう進めていったかを理解させようとする意図が読み取れます。

また、立命館大学自体が十五年戦争とどう関わったかということにも、焦点が当てられています。戦争は学生からペンを奪い、戦争末期には卒業していないにも関わらず戦地へと狩り出されていきました。立命館大学は早くから国家主義的な教育が行なわれ、1928年、昭和天皇即位の「御大典」のとき、御所などの警備のために立命館禁衛隊が組織されました。そして、1943年には立命館禁衛隊学園決戦体制が作られるなど、戦時下の立命館大学は軍事色の強い大学であったことが分かります。それを省みることで、大学として先の戦争と向き合う姿勢が伝わってきます。こうした反省の上に平和博物館が作られたことを訴えているように感じました。

③ 植民地と占領地

ここでは、日本が十五年戦争中に領土拡大をしていく中で、植民地や占領地の人々に天皇をうやまうような「日本人化」を強制させていったことが紹介されています。そして、日本の侵略に対し各地で抗日運動が起き、戦後の民族独立運動の基礎となったことも取り上げられています。

また、領土拡大に関しては、「漫画 冒険ダン吉」（島田啓三）が取り上

げられ、そこでは主人公のダン吉が、南洋の島で王様となって活躍し、南洋諸島への夢をかきたてるものであったと紹介されていました。このような漫画という身近なものを通して、一見戦争とは関係のないものにも着実に戦争の影響がみられ、当時の状況が分かることを改めて実感しました。

④ 空襲・沖縄戦・原爆

1944年11月以降、アメリカ軍による本土爆撃が日常的に行なわれるようになりましたが、その中でも大都市への無差別爆撃は悲惨なものであり、その様子がパネルで紹介されています。この区画には空襲を受け、戦火の中を逃げる母と子の像があり、弱い立場である人達は、この母子像のように、いつも逃げ惑っていたのだらうと感じました。(図3参照)

次に、日本本土でもっとも凄惨な戦闘を繰り広げたのが沖縄戦であり、沖縄は本土を守るために捨石とされて、多くの住民が戦闘に巻き込まれ、県民の4人に1人が犠牲になったことが紹介されています。

そして、この戦争を事実上終結へと導いた原子爆弾についてパネルや当時の写真で紹介され、また、京都も原爆投下計画に入っていたことにも触れています。さらにそこでは、広島、長崎に落とされた原爆は、ソ連が戦争に加わる前に日本を降伏させて、その支配地域をアメリカが独占しようという目的もあり、これはその後の東西冷戦の第一歩ともいえると位置付けられています。

⑤ 平和への努力

ここでは、学問・思想への弾圧と日本人の反戦運動が大きく取り上げています。第一次世界大戦後の国際協調、軍縮の流れから一転、十五年戦争が始まると軍国主義がとられ、その中で成立した治安維持法により、天皇中心の政治への批判、軍への批判、共産主義をめざす思想や反戦運動は厳しく取り締まられました。展示では、労働農民党の衆議院議員として、治

安維持法に強化に反対して活動し、1929年3月、右翼の手によって暗殺された山本宣治が紹介されて、そのデスマスクが飾られています。

また、日本人の反戦運動に関しては、反戦ビラが紹介されて、そこには「満蒙侵略政策反対運動を起せ！満州駐屯軍を撤退させろ！」というスローガンが書かれていました。

⑥ 戦争責任

展示の解説では、第二次世界大戦後の日本の戦争犯罪裁判はドイツほどには徹底されず、裁かれなかった戦争犯罪が多くあると指摘されています。例えば、天皇は帝国軍隊の最高責任者でありながら、戦争責任は追及されることはなく、中国戦線での毒ガスの使用や731部隊による細菌兵器開発のための生体実験なども、アメリカ側の思惑で裁かれなかったことが紹介されています。

以上のように、テーマ1では、まず軍隊にスポットを当て、次に戦争遂行には国民の協力がいるといった切り口で展示が進められ、最後の戦争責任へとつなげています。また、十五年戦争は過去のことでありながら、現在に問題を多く残していることを強く訴えており、この過去が現代と繋がっているという姿勢は、他のテーマでも一貫して見られます。

(2) テーマ2：現代の戦争

テーマ2の現代の戦争は、次の5つに分かれて展示されていました。

① 2つの世界大戦と戦争を防ぐ努力

ここでは第一次世界大戦と第二次世界大戦を通して、戦争は大きく変化し、被害の先を軍隊から民間人へと変えていったことが説明されて、ナチスによるユダヤ人の大量虐殺などが紹介されています。

また、戦争犯罪とは何かを詳しく取り上げています。戦争犯罪というと

戦時下での非道な犯罪（民間人の殺害、捕虜の虐待）ばかりだと思ってしまいがちですが、第二次大戦後には、戦争を始めること自体が「平和に対する罪」であり犯罪という考え方が確立したと記されていました。「平和」という概念に対する罪を確立したことに、戦争を防ぐ意志が汲み取れると思います。

② 植民地の独立と冷戦

第二次世界大戦後の世界の変化をここでは紹介しています。大きく取り上げられているのは朝鮮半島の分断とベトナム戦争で、この二つの出来事を取り扱うことで、背後にアメリカとソ連という強国が控えながら戦争が進められるという冷戦の構造を理解させようとしています。

展示ではジュラルミン製の生活用品が紹介され、これはベトナムの人々が撃ち落としたアメリカの飛行機を材料にして作ったものでした。（図4参照）また、日本の基地もこの二つ戦争では重要な役割を果たしたことが記されています。

これらの展示を見て、私たちは第二次世界大戦後から現在まで戦争を行っていないと言うことは難しいと思いました。日本が直接的ではないにしても確実にこれらの戦争と関わっていたという事実を、私たち深く知るべきだと考えます。それを踏まえ、日本の安全保障がどのようになされているかを考えることによって、日本に今ある「平和」というものがどのようなものであるかが理解でき、そこにある問題点も浮かんでくるのだと感じました。

③ 冷戦後の戦争

1991年のソ連解体後、アメリカは世界でただ一つの「超大国」となりました。それは冷戦時の過度の緊張で抑止されていた状態から解き放たれ、戦争をしやすい状態になったと言えます。展示では、ユーゴ空爆、アフガ

ニスタン戦争、イラク戦争などが例として挙げられていました。

この中では、「ファティーマのオルゴール時計」という、写真家の広河隆一氏がレバノンのパレスチナ難民キャンプにある病院を訪れた際に贈られた時計が展示されています。(図5参照) 持ち主であった11歳のファティーマは病院で治療を受けていましたが、ベランダに出ていて射殺されました。時計は日本製で今でもオルゴールが流れていました。実際に聞いてみましたが、本当に悲しい想いにさせられる音色でした。このように、遺品に触れたり、見たりすることで私たちは、より戦争について深く考えることができるのではないかと感じました。

④ 兵器の開発

ここでは、第一次世界大戦で開発された毒ガス、第二次世界大戦で開発された核兵器が大きく紹介されていました。兵器を理解するという事は、その残虐性についても理解することでなければならないと思います。戦争ではより高性能でより成果のあげられる武器や兵器が求められます。第二次世界大戦で使用された核でさえ広島、長崎にとつもない被害を与えました。今、より進化した兵器で当時のような戦争を起したとき、どうなるのか深く考える必要があると強く感じました。

⑤ 現代の地域紛争

ここではアフリカ、ヨーロッパ、アジア、ラテンアメリカの4地域の紛争を取り上げていました。それらはいずれも植民地支配の中で作られた対立があるという側面を伴っており、それを理解する必要があると訴えています。

(3) テーマ3：平和をもとめて

階を変えて展示されているテーマ3では、今まで知ったことを踏まえて、

それを活かして平和について考察することを促しています。

ここには平和創造展示室と題された部屋が3つあり、平和創造展示室1では、人間が本来持っている能力を十分に開花させることを妨げている様々な事象について考えることで、平和を作る道筋を探ることを求めています。

次に、平和創造展示室2では、平和を作る市民の力（市民平和活動）を紹介し、私たちに何ができるのかを考えさせようとしています。それは「平和」に対し何もできないと諦めてしまうのではなく、日常の中でもすぐできることがあると知ることにより、私たちの意識を変えていこうという狙いが見えました。そして、ピースボートというNGOの活動の目的である「知ること・出会うこと・行動すること」が紹介され、まず自分の知っている世界から一歩外に出てみることで何かを感じ、考え、行動することにつなげていくことを訴えています。

最後に、平和創造展示室3では、京都の平和を育む活動を紹介しています。例えば「京都平和史跡めぐり」と題し、京都府、京都市内のさまざまな平和関連のスポットを紹介していました。観光名所ばかりではなく平和を訴えかける場所が京都には沢山あることを伝えようとしていました。

以上のように、「立命館大学国際平和ミュージアム」では、戦争を単なる過去の出来事としてではなく、一貫して現代に結び付けようとする姿勢が感じられました。まさにそれは「平和とは現在の問題であり、戦争を学ぶことはその現在において平和を実現するための方法の一つであるというスタンス」⁽³⁾ であると思います。

しかし私には、過去の戦争がもっと深く「今」と関わっていることを強調してもよいのではないかと思いました。例えば先に挙げた憲法改正にス

ポットを当てて、この議論にいたる経緯をたどり、その中で日本国憲法ができた過程や背景を知る必要があるのではないのでしょうか。

3. 「大阪国際平和センター・ピースおおさか」における戦争記憶の展示

「大阪国際平和センター・ピースおおさか」は、先の大戦のような悲惨な出来事が二度と起こらないように、平和に向けて取り組む場所として1991年に開館しました。（図6参照）その理念は次のように紹介されています。

「第二次世界大戦において、大阪では50回をこえる空襲により、市街地の主要部が廃墟と化しました。こうした被害は大阪にはとどまりません。世界最初の核の被爆都市・広島、長崎、『本土決戦』の犠牲となった沖縄をはじめとして、数多くの日本国民が尊い生命を失い、傷つき、病に倒れました。同時に、1945年8月15日に至る十五年戦争において、戦場となった中国をはじめアジア・太平洋地域の人々、また植民地下の人々にも多大の危害を与えたことを、私たちは忘れません。人類共通の願いである恒久平和は、戦争の惨禍を知る世界中のあらゆる地域の人々が、それぞれの体験を伝え合い、語り続けることによって達成されます。そして、国内外の各都市・各地域で広がりつつある戦争関係資料の収集、戦争体験の継承への取り組みも、次第に高まっています。当センターも、大阪における戦争被害者にたいする追悼の場であるとともに、平和にむけての新たな地域的な取り組みを意図したものです。今日の世界は、なお多くの戦争の危機をはらんでいます。それらが局地的紛争から世界的規模での戦争に拡大する危険性は決して少なくありません。軍事技術の発達と人類を絶滅させるに十分な核軍備の存在は、それらが使用された場合には、かつての世界戦争の惨禍を越えるには被害をもたらします。戦争の惨害から将来の世代を護るために、人々が善き隣人として互いに平和に生活するために、私たちは力を合わせなければなりません。平和と安全への侵害は、現在もさまざま

な形をとりながら世界の各地で続いています。人権抑圧や環境破壊、貧困や飢餓などもまた、人類共同体の安全にとって大きな脅威です。それだけに、平和と安全に向けての私たちの取り組みの範囲も、ますます広がりつつあります。そうした状況を把握し、大阪府民・市民と国内外の人々との間の相互交流を深めることを通じて、大阪が世界の平和と反映に積極的に貢献するために、ここに大阪国際平和センターを設置するものであります」
(4)

この理念に基づき、「ピースおおさか」では、(1) 大阪空襲について、(2) 十五年戦争について、(3) 平和に向けての取り組みについて、の3つのテーマが設けられ、それぞれ展示室A、B、Cとされています。そこで順に展示について見たいと思います。

(1) 展示室A：大阪空襲と人々の生活

戦争の歴史は兵器の歴史と言われますが、第二次世界大戦では戦闘機の画期的な発達により、敵国の後方への爆撃が可能となりました。この敵国後方への空襲というものは、第二次世界大戦を語る時避けては通れません。日本各地でも第二次世界大戦中に多くの空襲の被害を受けました。大阪では50回を超える空襲により、市街地の主要部が廃墟と化しました。

「ピースおおさか」に入らずに目に飛び込んでくるのが、M69型、M50型焼夷弾の原寸模型です。日本への空襲では、日本のほとんどの家が木造であったので、この焼夷弾が恐ろしいほどの猛威を振るいました。展示室Aに入ってすぐの場所には、空襲を受けた時(1945年3月末頃)の戎橋筋界隈のジオラマがあります。(図7参照) このジオラマは床の一部をくりぬいて作られており、ちょうど上空から見下ろした形になっています。

ただ、上空(飛行機)からの視点としては、このジオラマの建物は大き

過ぎます。つまり、これは上空と地面の両方の視点で作られているのです。この博物館の設立に関わった歴史家小山仁示（こやまひとし）氏は、大阪空襲を振り返り、それを歴史に位置付けていくには、「地上の視点と上空の視点の両方を持たなくてはいけない」⁽⁷⁾とされていますが、このジオラマに見られる視点は、「ピースおおさか」の随所に見受けられ、それはこの博物館全体が被害者と加害者の双方の視点から作られていることを表していると思います。

また、資料としては、大阪空襲の詳細な被害数字、大阪空襲死没者名簿、市民の目で見た空襲の絵、6名の空襲体験者などが展示されています。それによると大阪空襲での被害は、死者1万5千人、負傷者3万1千人、被災家屋34万4千戸、被災者122万5千人に上り、大阪市の人口は1944年末の243万5千人から、1945年8月の111万人にまで減少したとされます。

そして空襲体験者の「首のない赤ちゃん」という話（空襲で逃げ惑う中、前を走る人に背負われている赤ん坊を見ると、もはや首から上はない、それなのに母親らしき人は夢中で走っているので気付かなかったという内容）が紹介され、当時の空襲の悲惨さを現代に訴えています。

（2）展示室B：十五年戦争

展示室Bでは、満州事変から第二次世界大戦終結までの十五年間の戦争の様々な記録が展示されていました。（図8参照）また、アジア・太平洋地域を中心とした戦争の実態を示すとともに、広島・長崎に投下された原爆の恐ろしさ、アウシュビッツに見られる戦争の非人間性なども併せて取り上げていました。

そして、「立命館大学国際平和ミュージアム」と同様にここでも、十五年戦争中に日本が行った様々な過ちについて展示されています。例えば、

中国との戦線で毒ガスを使用したことや、生きている人をそのまま埋めた「万人坑」の資料などが挙げられています。

私たちが広島・長崎を忘れられない出来事としているのと同じように、朝鮮半島の人々や中国の人々は第二次世界大戦での被害を忘れ得ないと思います。だからこそ、加害の資料についてもしっかりと保存し、この先の世代が歴史を活かすことができるようにする必要があるのではないのでしょうか。

また、この部屋の入り口には「泥濘」という一兵士が作った詩と、日本国憲法前文が大きく展示されていましたが、この部屋の展示物を、時間をかけて見た後では、憲法の大切さを改めて認識せざるを得ません。先の大戦で日本が犯した罪について深く知ることは、この憲法に込められた平和への願いと一致すると思います。

(3) 展示室C：平和の希求

展示室Cでは、現在の地域紛争や核の問題について、又、ピースメッセージとして世界の様々な著名人が平和について語りかけています。その中でも特に目を引くのが「運命の日の時計」(核戦争の危機を示すシンボル)の展示です。(図9参照)戦後の出来事をこの時計と共に振り返っているのですが、最初の1947年の7分前と現在の時計の時間が一緒だということには驚きました。人類は二度の世界大戦で戦争の愚かさを味わったにもかかわらず、未だに平和に近づけない状態にあることを、強く訴えていると感じました。

また、平和や戦争に関する資料が多くある図書館、映像室などが紹介されて、より深く考察、研究したい人に対して情報を提供し、大阪の非核平和宣言を持ち帰り可能な形にして置いてあります。

以上、この「ピースおおさか」では、戦争を被害という視点だけではなく、加害という視点からも捉えようという姿勢を強く感じました。戦争の記憶を語り継ぐ過程で、凄惨な被害を語り継いでいくことと、犯してしまった加害について語り継いでいくことは、どちらが欠けてもいけないと思います。ここは「大阪空襲死没者を追悼し祈念する場」であると同時に、日本が侵した多くの罪を知る場所でもあるのです。

特に加害の記憶は、意識して語り継いでいかないと、歴史から消えてしまいかねません。過ちからこそ学ぶべきものがあるのであり、アウシュヴィッツ博物館のように、日本にも敢えて加害について多くを語る場所があっても良いのではないかと思います。

4 おわりに

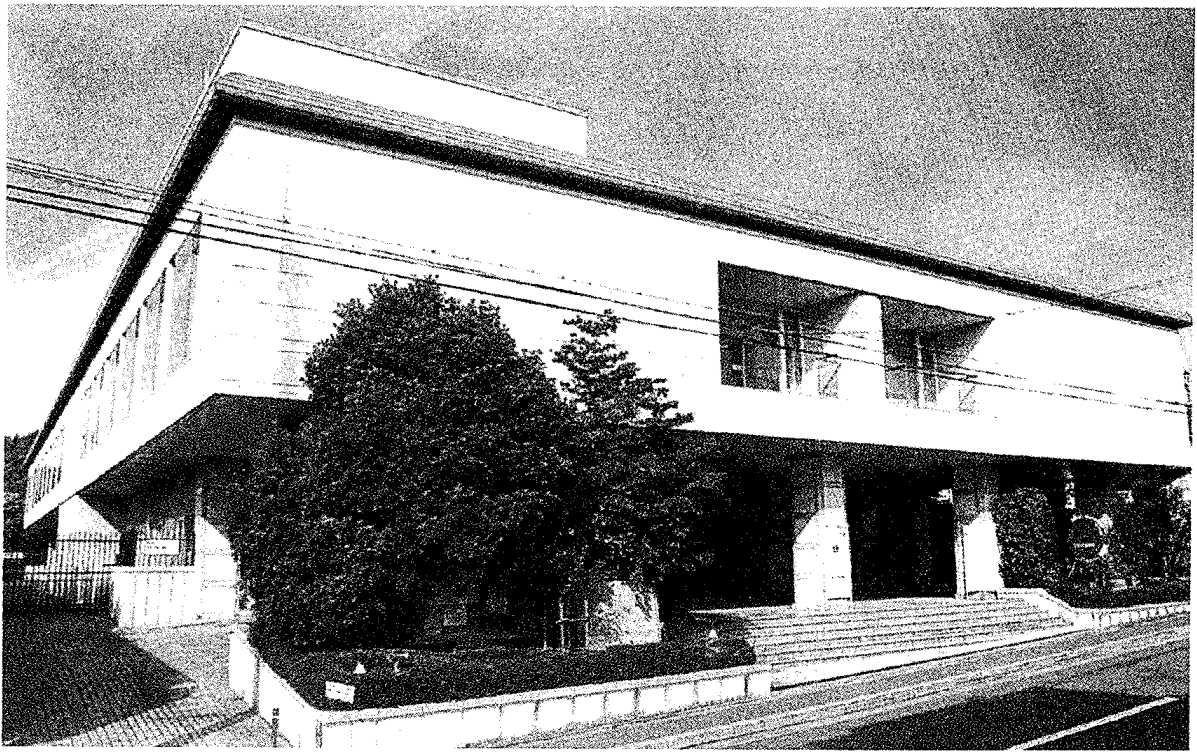
最初に触れたように、戦争を体験し語るができる人は年々高齢化し、少なくなってきました。私自身も戦争の体験者から話を聞いた体験がありますが、私に戦争体験を語ってくれた人は、体験していない人には戦争の実態は理解出来ないと言う一方で、全てが伝わるわけではないと思いながらも、語ることを止めようとはしませんでした。まさに平和博物館は、こうした声の結集の場であり、平和へのメッセージが強く発せられている場所だと思います。

しかし、平和博物館でも、やがて戦争を知らない世代が戦争を伝えるという事態が迫っています。これに対し、アウシュヴィッツ博物館でガイドをしている日本人の中谷氏が、「君たちに過去の戦争責任はない。ただし、将来それを繰り返さない責任はある」という収容体験者の言葉を紹介するように⁽⁶⁾、戦争を知らない世代の私たちは、今後このような姿勢で戦争を語り継ぐ必要があるのではないのでしょうか。

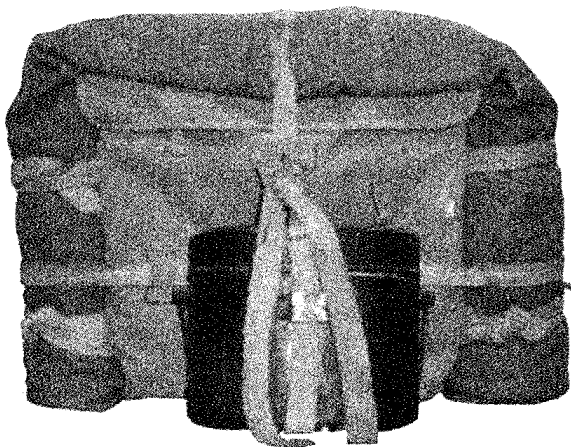
そして実際に、平和資料館として有名な沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」では、戦争記憶の風化の問題や、戦争を知らない世代が戦争を語り継ぐという問題に対し、既に取り組みが始まっています。そこでは、「語り手と聞き手の両方の共通点、関わり合えるところ、それは自分のいのちだと思う」と、語り継ぐ仕事を「いのちの仕事」としてとらえ、負の遺産から新しい価値を引き出そうとしています⁽⁷⁾。

このような戦争記憶を語り継ぐための方法を模索し、戦争を知らない世代に平和を考えるきっかけを与えることが、これからの平和博物館の果たすべき役割であり、それがいずれアジア諸国との歴史認識の問題や、今なお残る戦後処理の問題を解決する糸口になるのではないのでしょうか。

最後に、私たちは、今ある平和を当たり前のもので生きていくのではなく、過去と向き合いながらそれを守り育てていく義務があります。それゆえ、過去の戦争に対して、自分たちが行なったことではないと無関心な姿勢をとり、戦争記憶を風化させてしまうのではなく、未来のためにその記憶を活かすように努力し続けなければなりません。日本国憲法から不戦の誓いが消えてしまいそうな現在だからこそ、意志をもって私たちが戦争の記憶を語り継がねばならないと思います。



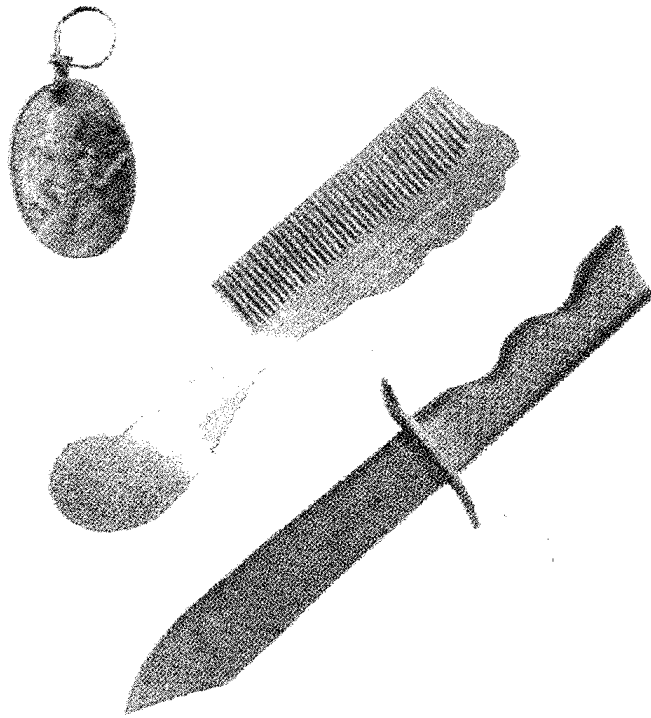
[図1] 立命館大学国際平和ミュージアム



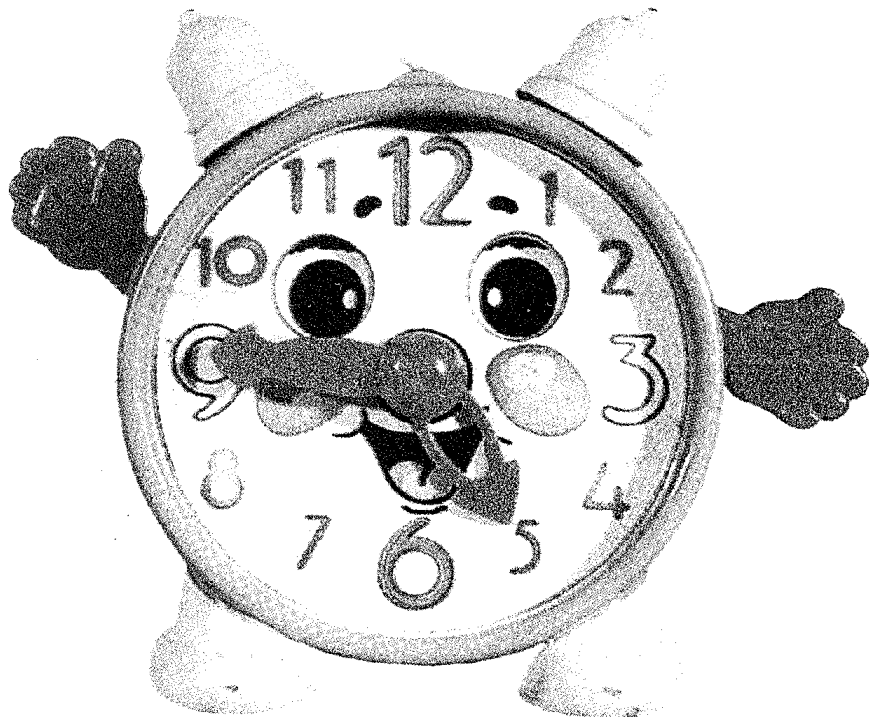
[図2] 背豪



[図3] 戦火の中を逃げる母子像



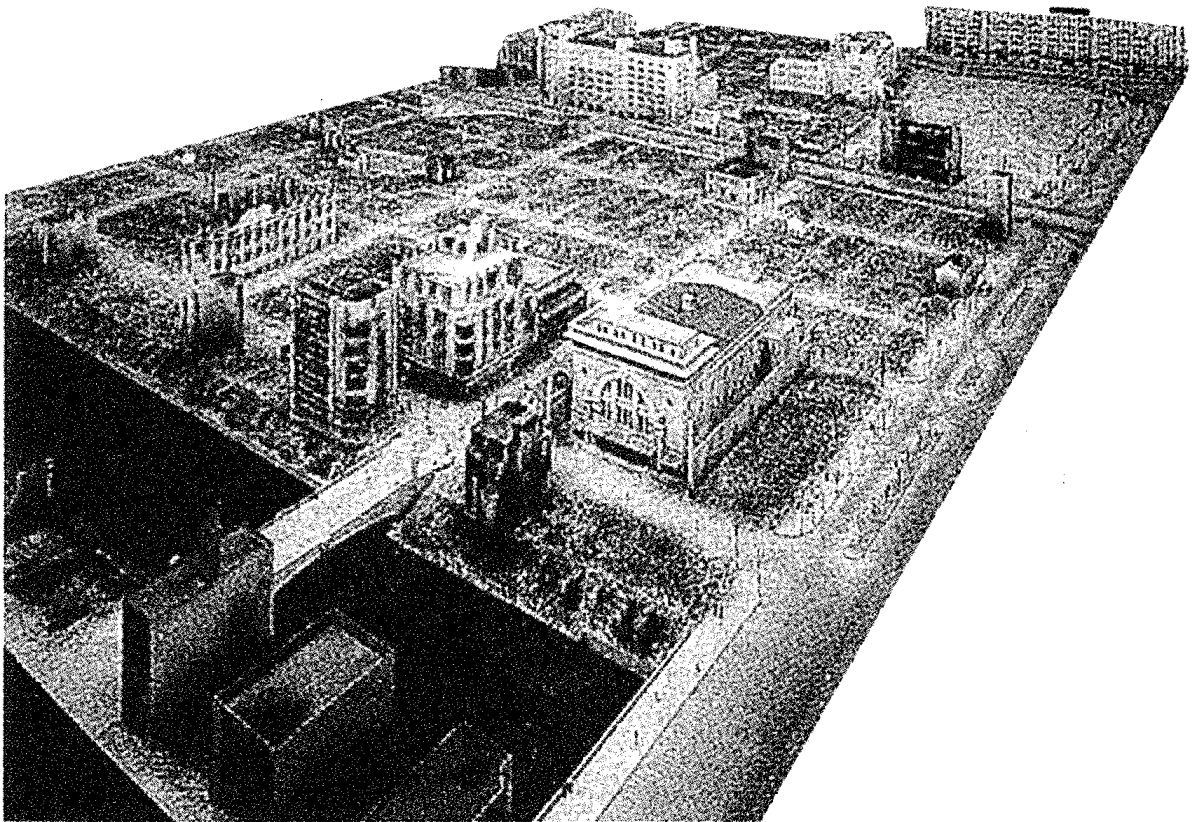
〔図4〕 ジュラルミン製の道具



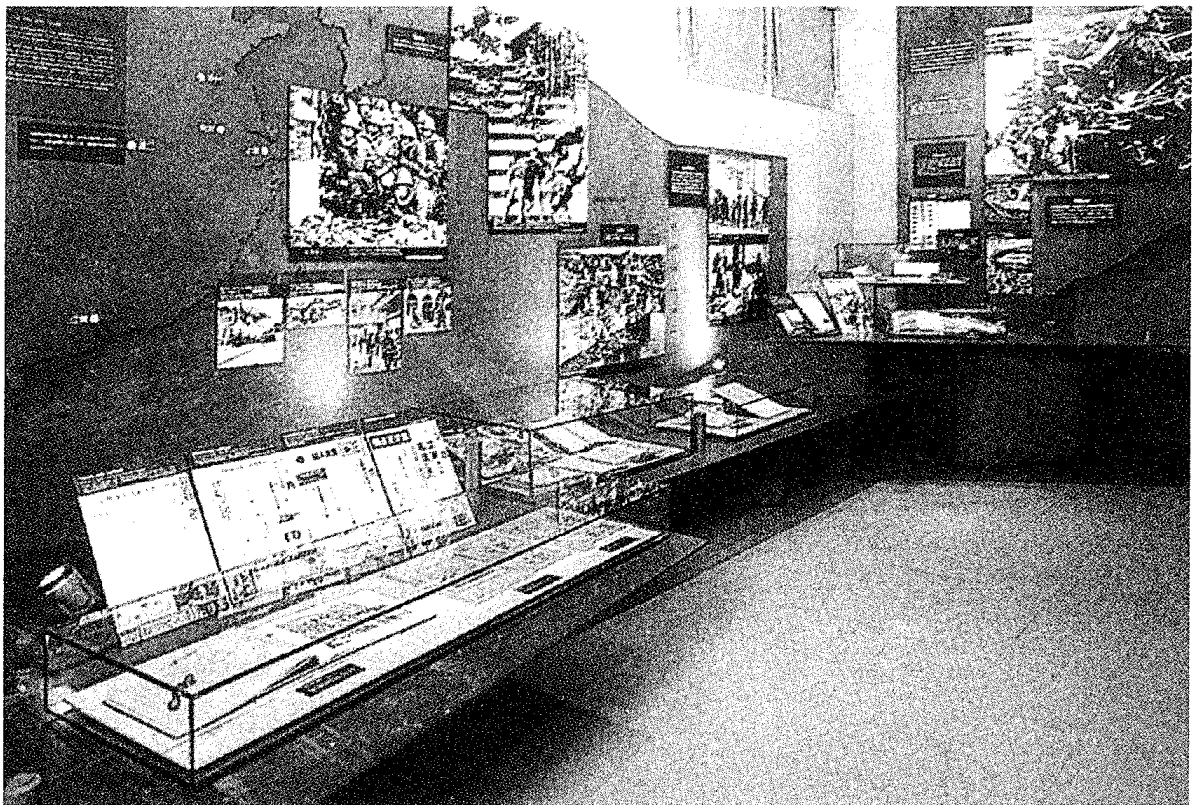
〔図5〕 ファーティマのオルゴール時計



[図6] 大阪国際平和センターピースおおさか



[図7] 大阪空襲時のジオラマ



[図 8] 十五年戦争の展示



[図 9] 運命の日の時計の展示

註

- (1) 早乙女勝元『戦争を語りつぐ』岩波書店、1998年、1頁。
- (2) 「立命館国際平和ミュージアム・ガイド」
- (3) 「記憶と表現」研究会編『訪ねてみよう戦争を学ぶミュージアム
／メモリアル』岩波書店、2005年、124頁。
- (4) 「ピースおおさか」ホームページを参照。
<http://mic.e-osaka.ne.jp/peace/rinen.htm>
- (5) 『訪ねてみよう戦争を学ぶミュージアム／メモリアル』、74頁。
- (6) 東京新聞社会部『あの戦争を伝えたい』岩波書店、2006年、222頁。
- (7) 下嶋哲郎『平和は「退屈」ですか』岩波書店、2006年、39頁。

図版出展

- [図1] 「立命館国際平和ミュージアム・ガイド」
- [図2] 同上
- [図3] 同上
- [図4] 同上
- [図5] 同上
- [図6] 著者撮影
- [図7] 「大阪国際平和センター 展示のしおり」
- [図8] 同上
- [図9] 同上